

# カラマツ林業における素材生産の展開 —北海道十勝地域を事例として—

中尾信彦（北海道大）

## はじめに

北海道十勝地域のカラマツ人工林の伐採量は、1996年の323,574 m<sup>3</sup>から2006年の570,665 m<sup>3</sup>まで増加してきた。十勝のカラマツ林業は、拡大造林期に植林された人工林の育成に伴い発達し、育林期の素材生産については、主に森林組合とその下請け業者が担ってきた。しかし、近年の生産力の活発化は、どう担われているのだろうか。そこで本研究では、素材生産が活発化してきている十勝地域を事例として、どのように素材生産が展開しているのかを明らかにする。

## 調査方法

まず、カラマツ製材業の動向をおさえた上で、製材業の原木集荷方法に注目しながら、素材生産業と製材業がどのような関係を築いているのかを把握した。次に、育林期の担い手であった森林組合の主伐期における事業展開を確認した後、民間の素材生産業がどのように展開しているのかを把握した。聞き取り調査は、十勝地域の15森林組合、素材生産業者8社、大手製材工場3社を対象におこなった。

## 結果と考察

製材工場の原木集荷方法は、大半の原木を大規模な素材生産業者から確保し、補完的に広範な業者から原木を集めてくる体制であった。大量の原木を供給する素材生産業者の存在は、工場からすれば原木集荷の安定化を意味し、素材生産業者からすれば事業量の安定化を意味する。また、工場と密接な関係にある業者は、工場の規模拡大を事業の拡大につなげる場合もある。

森林組合にはいくつかの展開があった。まず、積極的に素材生産をおこなっているタイプである。このタイプは、系統販売を利用せずに民間大規模工場と密接な関係を築いていた。一方で、間伐に関する素材生産以外を行わないタイプもある。その場合は、地域に有力な素材生産業者が存在し、一定のすみわけがなされていた。また、森林組合の下請け業者の中には、複数の組合の事業を請け負い、高度の機械装備を行い、独自に展開している業者も存在していた。

90年代以降、十勝の素材生産業は、高性能林業機械の導入などにより、その生産力を高めてきた。同じく森林組合も生産力を高めてきたが、十勝全体の素材生産のシェアを相対的に落としてきた。十勝の素材生産業は生産力を高めながらも再編がすすんできたのである。しかし、機械化が一定程度すすんだとはいえ、伐倒作業は人力が一般的であり、高齢化しているチェーンソーマンの再生産が喫緊の課題である。また、商社系の大手資本が先導する原木集荷もあり、その原木消費地は本州である。一方で、大規模工場は十勝外からも原木集荷している。そうした意味で、地域資源生産の外部化がすすんでいる。さらには、カラマツ資源の齢級構成から、その資源枯渇が危惧される。それらを踏まえれば、近い将来、十勝のカラマツ林業は資源の収奪競争に発展し、大規模な再編期を迎えることになるであろう。

（連絡先：中尾信彦 nobuhiko@for.agr.hokudai.ac.jp）